

町内で発明された脱穀機

実りの秋も本番を迎え、農家の皆さんは稲刈り等で忙しい時期がやってきました。

農業が機械化される以前は、すべて手作業で行っていましたが、人々は少しでも効率よく作業を行うために、智恵をめぐらせ様々な農具を開発していました。

穀物の脱穀は、古くは「唐竿」や「扱簀」などといった農具で行われてきましたが、江戸時代の十八世紀前後に「千歯」が発明され、脱穀作業の効率が大幅にアップしました。この千歯は明治時代の後半頃まで脱穀道具の主流でありましたが、明治の終わりから大正時代にかけて、さらに効率の良い「足踏み式回転脱穀機」が発明されました。これは、針金のついた筒型の胴部を、ペダルを踏んで回転させ、そこに稲や麦の束を押しつけて、回転の力で粉を落とすというものです。近年までは豆類などの脱穀などでも使用していた農家も多く、ご存じの方も多いと思います。



写真1 池富式脱穀機

同じような脱穀機が発明され、それぞれが特許・実用新案登録をしていたからです。当時の農具は一人が発明しても、その製品のみが全国的に普及するほどの製作・販売の流通体制が確立されておらず、各地の知恵者が形や性能を少しずつ変えながら特許申請し、その地方で販売していたのが実状だったようです。

こうした地方の発明家が町内にも存在しました。大正九年から泉村の助役を務めた養野の池田富治郎氏（明治十八・昭和十三年）は、自身の名前を省略して名付けた「池富式脱穀機」の発明者でもありました。発明時期は不明ですが、足踏み回転

脱穀機が普及した明治末期から大正初期の頃でしょう。

また、同じ頃、奥津川西細田の光永敬一郎氏も光永式脱穀機を発明して販売していたようです。これらの脱穀機がどのくらい生産され、どこまで流通していたのかは明らかではありませんが、奥津町史編纂時に当時の編纂委員が調査した結果、県内には羽出の文化伝習館に池富式が一台のみ現存していました。写真が現在残る唯一の池富式脱穀機です。木製の胴部には粉を絡め取るための折り曲げた鉄線を交互に差し込み、木製の脚部の片側には、手回しで胴部を回転させるための鋳物のハンドルと歯車が付いています。銅板の商標には「登録新案 四三〇七五號 池



写真2 脱穀機の裏面



写真3 脱穀機に付いていた商標

富式脱穀機」と書かれています。

江戸時代以来の農具を使用していた人々にとって、輸入鋼材を使った歯車やネジなど西洋技術を多用した足踏み式回転脱穀機は革新的に映ったことでしょう。

当時は日露戦争が終わり、日本が国際社会で存在感を現し始めた頃です。こうした情勢の中で、農業においても新進的な風が吹き始めていたことがわかります。

「池富式脱穀機」は、奥津歴史資料館に展示しています。

参考資料：『奥津町史』通史編

『国立民族学博物館研究報告』21巻1号
宗森英之先生の「ご教示」

お問い合わせ先

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733